# 石狩日誌 全

左院


和書門
類 八八四 號
一八八 函
一七 架
一八 冊

内閣文庫
和書
八八四 類
一八 冊
一七八 函
一〇 架

内閣文庫
番號 和 8884
冊數 17 (11)
函號 178 242


国立公文書館
National Archives of Japan

東西物産
地理風俗記

# 石狩日誌

多気志楼蔵板

左院
左院藏書
元老院圖書印



凡例

蝦夷の地石狩川の巨大なる哉其源石狩岳より出
吉あり一百餘里を流れ半面を人家に分
況や其原を文化度間に来神受[illegible]
年来往々聞こゆ初人杖を曳て始て後五十
敢て西岸ルモツペフ越る翌丁三の春函館府法象
命じ其原を探り岳を攀て山流水孫を審に帰り石狩志七卷を
著て納むる事と成大文成稿て七二年十月好の士の目撃に供に
依て文の疎漏あんを敢て蒙初行[illegible]

を禁ぜ[illegible]り五人と歌を付原稿七冊を閲するに山川地理樹木
異島生産戸口人多人情地名の和譯を要するものあり
帝延紀元庚申の立秋松江下宿屋表にて餐熱豆居
破窓の下　源の弘志[illegible]

# 石將日誌

己丁　伊勢　松浦竹四郎源弘著

安政丁巳四月廿五日大塚泉（イズミガ）と函館港を發し大井村小宿を[illegible]
黑松内越（クロマツナイ）を越ス小出浜を過て次幌武分（ホロ）袖案内（イツヤ）を辨ら
五月朔の快晴刳木船（マルキブネ）を求て土人スイドサケヌカルと和人数人を
雇てシリベツ川名小溯ると汁滿漲水勢起波瀾上ること絶ナ里ホを
登ホ志を遂（トゲ）て二日にして復た歸る渡しるのホ屋ホ宿
三日暁の雨雷電（ライデン）岩内（イワナイ）を発セベンケを呼ソウヅケ村を渡る
四日早雇土人ホ名山ホ人甲夜イクシユンケルベシベホ露宿

五日薄暮ソウヅケ川（レリベツ）ヘ着き此所奏張有り長く山を班（ムラキエ）行して
又々ここを出て一日憩息して陸路クツレヤニより高山二ツを越
雪路をヨイチ山城の番小屋に取り八日和ヨイチに着き
九日上程ヲレヨロヒに小憩ヲタルナイ小番に寄梶梅水仙満開
十日半坂石狩に着き上流のヘウを支配人小使を伴てトミハセクトロセツ
カウシ同ニホウンデ上川アイランケ同の四人を水夫を宅に此ての弊を
当夏ルヽモツペ越より石狩知る所に帰り来る餘志りの分ふ十人宿
一回へ酒煙草糸針等を送る
十一日より表艤舟鮑鰍米塩味噌等用意を長川糸儀を厚く送りを
指揮して焼酎七樽を寄せる餘せる依て一絡を紙に集小贈る

十二日暁解纜して出船フルヒヤウス（地名）レヒヤウス（地名）ヲヤウ（地名）遠小舟や両岸
より土人ども出て我等の上川小到るを義て寄語をなすこと多し
バンゲトヤウレ（地名）ベンケトヤウレ（地名）鮭漁屋多し此地鮭漁の繁昌
なるを思知る極寒風に乗る暁霧吹散るに依て岸の柳を切
是を敷て艇小狩び一葉の款冬（フキ）を被き遠に〻（トヒ）擢小一葉を
陸に附帆とし引やハツレヤブト（地名）見当川水八の支流なり
（浦上）漁小屋より上陸古飯（カタクラ）倭の戸に一絡を送る針位年未なる
款冬大於傘葉〻翠陰清折換苫蓬坐又為帆席行
此夜〻ここに泊る小狩り水勢迅く小狩一回小出勢

トウブト（地名なり 此方ヽ番川 第十一番の支流なり）トマヽタイ（地名）を云ふ一夕方洋石狩番屋ヽ至る（従ヒトイ 五り）
此所漁屋数拾ありしに於ゆ其焼失に依て今名ルヒヤンケの家に着く
是丙午の年より一面の識有去ル再会し是度此家ニ来る原大本
及び鹿肉鮮魚等を以て饗し翌朝其賃一升を我に銭ニて
十三日暁天文席を以て帆に換ヘ出ル此ヨリエベツブト（従ツイシカリ 是より）是番川
第三番の支流なり上る事五里余にして二ッ乗ル左をシコツ左りユウバリ川
すなわちをシコツより数里程千歳會所ありユウフツまで出る道あり
此邊迄越て平地楊柳 赤楊 白楊 秦皮 楡の外雑木多し 只椴（トヾと云）
七未なんを針位呈より丑寅に向ふなりヲタルナイ岳を右に西に見
カバトと鵠首する所あり ボルムイ（従エヘツ 四里）第十番の支流源也

ユウバリ岳より岳る山を仁ゝや老鷺（カツヒス）鳴鴻（カツコ）長不往〻再馴ぬ小島
多く啼り面かゝりしの扱掛ゝり棲家（カタキヤ）の時〻解へ吹落ゝ行ゝを
其悪息ゝ玉国ゝ岸ゝヲカバイ（地名）ポロヒリ（地名）宮ゝを巳ビバイヌタフ（地名）小
京小一挺の鍬を持ゝ〻アイランケを上陸させ舟を三人ゝて上ゝ
ビバイ（ホルムイ四里）と所丹九の支流源を是ゝユウバリゝ来ゝや是と
ゝ十七ハ丁て一繞の聚烟を見ゝ上ゝやアイランケあり最早九
小屋仁文度を行ゝ止宿の用意仁家も敷きゝ訳（ワケ）を問ふ七ゝ
来ゝ所仁岬仁ゝ行ゝ岸ゝ所陸ハナ方斗ふ拓ぬ舟も
小弟ゝ陸を曳越ゝ行ゝ仁ゝ語ゝ内ゝ侍ゝ乃人ゝ度去年
余宮止宿ゝ一変ゝて年月姓名を本ゝ記ゝ

依ゝ十ゝ侍ふ一絶を筆仁ゝ

江邊草作褥一夜枕東流嘎〻水禽叫悠〻動容愁

十四日去一日晴山を驟（シカ）ふ融水勢ふ漲ゝ仁ゝ人ゝ歩も除程苦辛
東岸ゝ西岸ゝと其遡流の二ゝ仁掉さ一上ゝ仁レベツブトサ
ツビナイ（地名）歩同ゝ手地ゝ見ゝ岸ゝ（ビバイ九七里）ゝ差ゝ改所
去年ゝ人家（イナヲトクミ）一軒有ゝ七年ゝ拓殖ゝ依ゝ川原ふ宮仁
トミハセゝ山ふ入ゝ一匹の狐を獲ゝ帰ゝニホウンテゝ虫ゝふ絮き鉛を
用ゝ（ユイ）ゝ枇花（ヒユフン）奥を絶ゝ時仁数十発得月下一場を伏ゝ臥ゝ

朗晴三両日雪解添春漲東岸又西岸蓬庭夢一場

十五日出船ゝトミハセ（人名）セツカウシ（人名）両人ゝ巳ゝ家ゝ七ゝ差仁

るゝ事を悦び一ツ〳〵に出精しけるや
キナウシナイ、チヤシナイ等と云ふ所の
所々滝瀬(セ)の有るにも障らず取続く
ハッシヨソラチブト(ウツカ)、ウラシナ(イ六里)より此
川は二筋に流れ源をトカチ岳より
来りると(ナヽセハテ)トツクフト是より六り
上に至るや土人艀を叩くと
黒宮(メノコ)一人茅萩の中より眺め居た
帰り行る其家の内に敷席(ヲキナ)を千き
侍らしんと案を繕り依て上陸して

ハセイタハウシの家を舍りセツカウシ此
家へ着し一同乃志ん煙艸針糸火酒
等を与へて旅人此者へ家に名慈(キト)一輪(フクシ)
艸と干鮭を出し饗の餉まで参て出し
家の傍に狸豆(ムニノカン)、眉豆(マレメ)(インケン)、粟(ムンシロ)、穂粟(リチアマ)、稗(ヒヤハ)
等を作る是皆黒層(メノコ)の業なりて
○や彼等未だ鍬をも持さる運
上居らぬも彼方へ農業を教させ
禁じられるの由に決して渡さあると
や依て鍬の様に柄を附用ゆ

○数隊ニて突(トツク)ニ出ル事不来ル人ハ皆ニ人家の宿
十六日東雲ニ不出船ニ朝風頻ニ強吹ニ垂場ニ出ル
水掉ニ成ル風波の為り髪ニ掛ル朝風
宮口吹ニ急キ引ル事ニヲレラルカブト小和ル清ル井七の支流ニ掛リ
源ヲマレケ出ル後ニ帆ヲ巻ル
名ニテレホの西ニ岸ニ見ル本川ニ入ル所ニヲフイビタ
ラ出ル所ニ新荷蔵ニて風ニ帆ヲ掛ル出ル所ニ舟四艘ニ出人等
三千人ニ余リ我ニ先ニ出ル出ル近所ニ休ル見ル名クッチンコレ
一人ヲ呼ニ掉ニて掉ニ出ル著夫ベツバラニ寄ル所人家二軒
レスエンリレウ
小使インラム 此ニ名ヲ我去年ル、モツペ越ニ上ル高地ニ出ル

ウリウカモイコタンハ
壹ヒ巻リの柱歌カリ

廉蹄草の歌
上川メムハ多ク
四五月ニ花盛リ

此馬此ハ
ナンバンキセルヨリ
歌ハ少ク異リ
上川イチナンケハ多ク

石將方言
ヲユ、ケ　奥で城壱地山深き川ホ
ラる名を呼くるる名をて
喜任曰　ヒメコロ　トウガラシゴマ
とくふまヤマセミとも云山鳥ろ
一種く奇ホろもるるるる
ミ得る嘴をポンくと
叩く家ホ毛るる

讀畫齋主人寫照

シリベツ石將方言
キサラウシチカプ　ミ訳訳の
毛ろ耳のめくびやそうして長し
そのろ花時も灰白ホ人やそとも手ホ耳ス
人ミとも羽毛ホ皆班ろる
クスリるとくミる長まい異るミるしくとと久稲是徳に
ひとるとる彩り

喜任曰
花班島

[illegible]とも云ふ手拭を以て土産[illegible]墓前に供ふ妻我れチライニ
足を切落を扱洗を度熱て手地喰野ホて種こは妻[illegible]有し
別て藤多く生ふ多く扱て抜て[illegible]土人[illegible]怪石
三度料尺[illegible]を敷ホ一[illegible]を織[illegible]

孤村夕日没樹裏炊烟生驚聞熊児吼當頭新月明

十七日朝出船水夫五人をして[illegible]崖ホ出燕[illegible]巣を拵の
[illegible]驚き[illegible]幾つ[illegible]ヌツコトイ（地名）ヲキタル（同）ニウレベツ（同）
[illegible]イジャンに[illegible]三軒（ヤエコエレ イカレロレ カニホロカ）[illegible]
水勢[illegible]ナイタイベとふを[illegible]方
神変（ベツバラ ルチヤを カモイコタン ヤヤシユホセと云り）の（シキウシレバ 荷物有所）[illegible]

荷物を上[illegible]船を繋[illegible]又向岸に
（シユコチセとて岩家）[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]
水[illegible]（チヤウザメ）[illegible]
[illegible]クウチンコロヒ（モリ）[illegible]
チライを[illegible]セツカウシ（ヲニヤガラ）赤[illegible]
麻（一名ヌヌビトノアシ）[illegible]
[illegible]

十八年最出遊ス主人石の四方を穿て嘯しむ先ず指を一同に主人ハ椒酒一斗をクウチシコロを出て新巖を攀巨石を穿て怪異を別越し一ツの名區を分て切にホロレブレベと云ふ兩岸より川中に傾て高さ三丈ハ一ツの滝を出て巻くしホロレユマと云ふ又中に穴ありて烏帽子の如き岩屋出ホシレブレベと前に同き岩屋壁を穿ち所の陰くしホンノミシタルマイ　ホロミシダルマイ等の奇石多年に挺出して高く枕を流せりラナエルレと云ふ右の方平石出て大岩の上に坐す主人ハ巻きを解て深潭に垂索を投て所謂鬼の目鏡と云て凡三間半の井の如き穴三ツ通て深き所も一丈餘又深き五丈ばかりとて エモレケレと云て山靈鬼を切んとして洗ふ又先を切辺に所と云サヌレベリと云ハ兩岸俱峻て高上水渦を巻きてテツレヲマナイと云て南岸に一條の瀑泉をテツレとも水底に柵を結り如く一ツ出て石垣抵の如きのやうなるもの茅ルイカウシと云て茅に石橋を有て内を傳ふるとハルレナイと云ふ出る所レキウシバルサテ出る所ヒカモイコタンと云所あり是より又舟を上て上流の岩面に記して

水聲耳既慣眠到東方白雲晴日三竿起来先漱石
殘山又剩水危棧蜀中同歴〻記奇景筆凡慙放翁
山水両奇絶神剣與鬼二看来皆破膽造化巧無窮
嵒罅水愈怒吼〻恰如雷屬目皆堪記愧無華客才

神庭の圖

国立公文書館
National Archives of Japan

水底も石にて有る大石滑厚く水急にし崖樹梅枝葉密にし實り根をさらし峯立し峻崖にも白糸を乱せし如く或は岸を濺ぎけるも怪むべきも如何にも除らヘンケアソナイ アソナー等ると左方ニイツイ(鬼)シヤバ(首)と云は数丈の巨岩の水中に聳立土人是も此所まで来(エナウ)を削て途中の安を祈るアソナイ フイラと云突出たる大岩を流れ礙て波濤を逆に起すカモイ子トバケ(鬼の躰)と云七八丈の立岩恰も鬼に躰の如き物崎立几此辺は甚急流也土人も此の根岩角に上りて離れて其三人は水篙にて突張舟を垢(アカ)を汲捨て辛苦悲しむ土人弾指の間にも如何や其千背を流れ恐き事數度也レイコロプイラと云ふ間もなく急瀬にトレフサラ子プと云





を彼鬼針の様へ落りし蕎麦葉貝母(ウバユリ)(トレプ)和名康かれを籠(フコ)(サラ子プ)に化石拾ひと為す此鬼神其を種々の縁故も有りける土人は他に持出を厳禁なりとや是をヲヽコツナイ イヌシナイ等数丈の瀧有りエタンヘツブト此辺へ来るや皆遅流と成て出ん事を祈りさてチカプニと云小山は蘩に茂し皆寄て左に畝をなし森有りて其中繁に出流木に繋ぎて一夜を明し此夜は末水中に一絶を記置

繋艇垂楊畔　霏微暮靄浮　蓬窓苦蚊齧　半夜泛中流

十九日早解纜てサキシリシベツ サラベツ等も過チクベツブトへ着く此所番屋一棟あり先一同の安を祝し此舟をも待て此所の人足を定め上川往の土人も一軒に煙草一抱に人々に糸并針并て其

六千余戸の名所手拭一筋を書て
廿日暮て出て梅の浦より閻魔ヶ入梅木沒ヶ列る此地高低後
廿一日出船　クーチンコロ　タヨトイ　シリコツ子　トミパセ　等を連て
チクベツ、ヘツチウシヶ列る所ノ人家ヶ新　シリコツ子　バリキラ　レ
一ツ五軒ノ見る所ノ人家流木にて舟を上ぐる為に依て要ヶ舟を
立門前より陸路を陸地箭筈欝葱と是をふり酸辛筆ヶ通
新年後に蕗ヶ出る是を採りて夕方岳の麓
踏て宿る七日　鯉ヶ足を獲たり　七日の夕に
廿二日拳ヶ堅雪の上を歩き頗る苦一四と梅木沒り西ヶ
の方跳て高方行見る岳の麓伝て西南ヶ回る夕方ベツの



川前ヶ出る樹木を折り一男子ヶ宿る成家夜ヶ休
廿三日月新て出足に雪を拾て新ヶ辺て新ヶ
各婦四人ビ、の禁ヶ出家て同所を見山ヶ抜て泥濘を
黒烟夫を利て人の方にビ、ベツも出る川出る
故ヶ水ヶ酸味ありと云る山出る岳嶮て上り新伝て下る所ヶ
本多にして茅草ヶ出て火を放ち宿東ヶ煙立天を焦て実愉快
廿四日晴風無吹て火を収出て徒歩を下る所ヶ大に平
川の東岸伝て下る孫の夕方ベツの宿に宿る
廿五日陰雨蕭々チクベツの上を出て年後人家の無ヶ出る所ヶ先達の
伝本て水ヶ抑留され渡り新て所ヶ川原ヶ出大声て呼る

胡女一人出来り番屋この廻りを掃除し居まり

雨餘暑約断其如道路阻隔水對老獠水聲攪人語

廿六日夜中より降る雨愁を水源の教寺人を定るビヤトキを太法手を
熟不喰とれて是只左の如一存まし不具ゆまるも山井のつ麦麦故に
是を魁首とレリアイノ イワンパカル セツカウシ等多人ゆ申法々る
夕方時分本郷を作る山井ゆ竹一筆洞一陶を開て

山雪映天冷水煙遠樹斜沛然一夜雨滿澗糝揚花

廿七日起解纜を七八丁まてメム迫所人家五軒（クウチンコロ シュシコトイ シリア）
（イノ カントキ ワイランケ メム）を屈曲こる小流の涌出る所を云しこの邊の
老婆行ゆを駭犬五六疋を伺まるの其家を問ゆ小鮭解ゆ

山川より潮ゆ来る人を拉檣そ取ゆ老婆ハそれの等ひ鮭ゆ取
犬ゆとゆとゆとゆとこの所ゆ折解くれしと朝を艣（ムロ）繞ゆ多く潮しゆ見を一見
きゆる大の川岸ゆ泛舟に艣川より上り来る泛舟に乗ゆ犬
飛ぶて真ゆ舟を咬（クハ）て持来りゆを外の等ゆ泛舟を附るゆ
制し方長沢儀百姓物行り紙ゆ法ゆ老婆ゆ犬を大切ゆ
我ゆ等ゆ毋ゆ咬ゆ等ゆ蜂（ハチ）飼ゆ蜂り秋味の法を一月に四五度
も取獲ゆ等ゆ板又出船して上ゆ水勢ゆ多く急岸流水
多ウレヘツ（ヲ名）ヲチンカバ川泛所教寺ビヤトキの家ゆ川を上て七
所に築柵（テシ）を作りて上り艣を取内り又黄脂（ミカエ）の来る巣立一所
不日の者ゆ陸まと八斗の麝（カワウ）多く群集り鉄を土人等を雛（ホンユウ）

けるを取て捕らんとするとてウエンギウバ名ヌサウレベ同キンクレベツ同等此所の人家二軒有ユラクセ又須更イシカシル

るとてアサカラ麦ゴ人家ら此方百五軒有り二ホウンデアイランケ等の

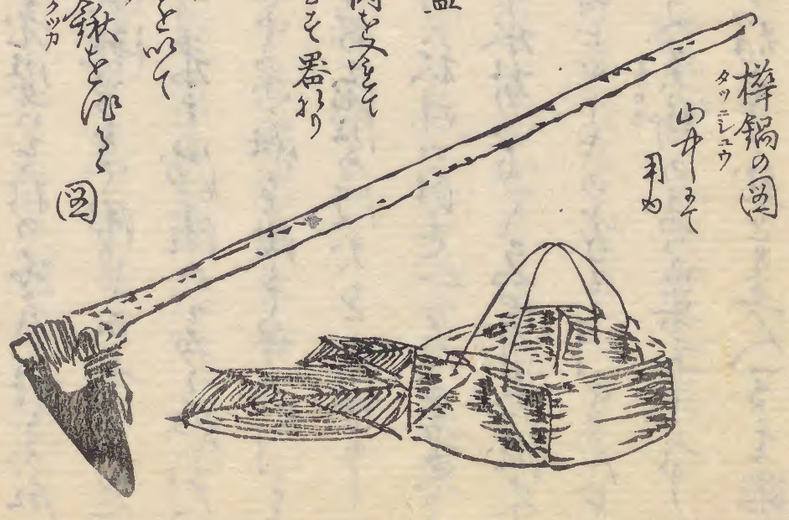
あく供よ出迎ひ家よ蕎麦ハ葉貝ユリ

毋の園子と乳羊根を麦魚ホシ等を見

鮭卵を塩で見と云人の砂糖じゃと

云て一笑し一同の名振舞ます

延胡索アンラコロ黒百合を一袋宛の






糧あて長さ三尺ウエンベツ代宿を出ず人家五軒イソチュウ コマ ラフコエキ

ハシグル エナヲアニ此所へビ、の五人居る呼出し五度拍子取る

蓬窓山色曉乱栅水半流烟歛朝暾上處々聽鶉鴟

廿八日朝霧濛々上陸して南岸を辷て十里四面ゴ思ふ曠野すて

茅茨数ゴ虎杖枝くしゴを駕り長ゴ出来の川らと雑り目ゴ障ゴ

去て石狩岳に蘇を一時に八度ゴ行り十ゴ文ゴ茅茨ゴ苔の沼成

使りて切ゴ深て滿ゴ流ゴ人ゴ也ゴドンブリ風呂と云て

行に長ゴ風呂ゴ入りゴ長ゴ晒ゴ故ゴ土人ゴ法ゴ

風呂ゴ入る事ゴ一生の掃除ゴ也ゴ坊ゴ入

ゴ病ゴ有て温泉ゴ浴ゴ必ゴ衣服ゴ脱ゴ着ゴ

ほとゝぎす啼かぬ所なし元四里ヨリ五里伍 数国社擬柏原
よりの形り変ふトコロとふさゝれ岩山一ツ山蛮(ヤマリモイ)ありて水郡(ケラカテ)を立
又根をあゝ子三度土人も必ず是を取るとゝ又小さき山三ツ汁をつ
タオイチナンゲ(ほこゝ三山と云ふ所り元四里)長門陽ふ常を盃の竹及転敢ありて
故ふ取に乃ち反物りきゝ一足も出さりしかり
夢ふ見たきぬ山ふ入れる枕刺牙一夜を守る努て
伏九の濃霧封山惜も混沌界のゆゝ依て流れに倚て上や茅ふ出
て曠き事志を敢一此遠鶴多一兵とも出人も見を取るさゝし鶴と
遠き形りの子元二里ヨリて山ふ上り又ヨリ二ツ牙最ヨ岳の半腹
とも名た出人ふ問て未ゝ是ら山を越てアンダラ、ソヨマナイ、ヘウレ



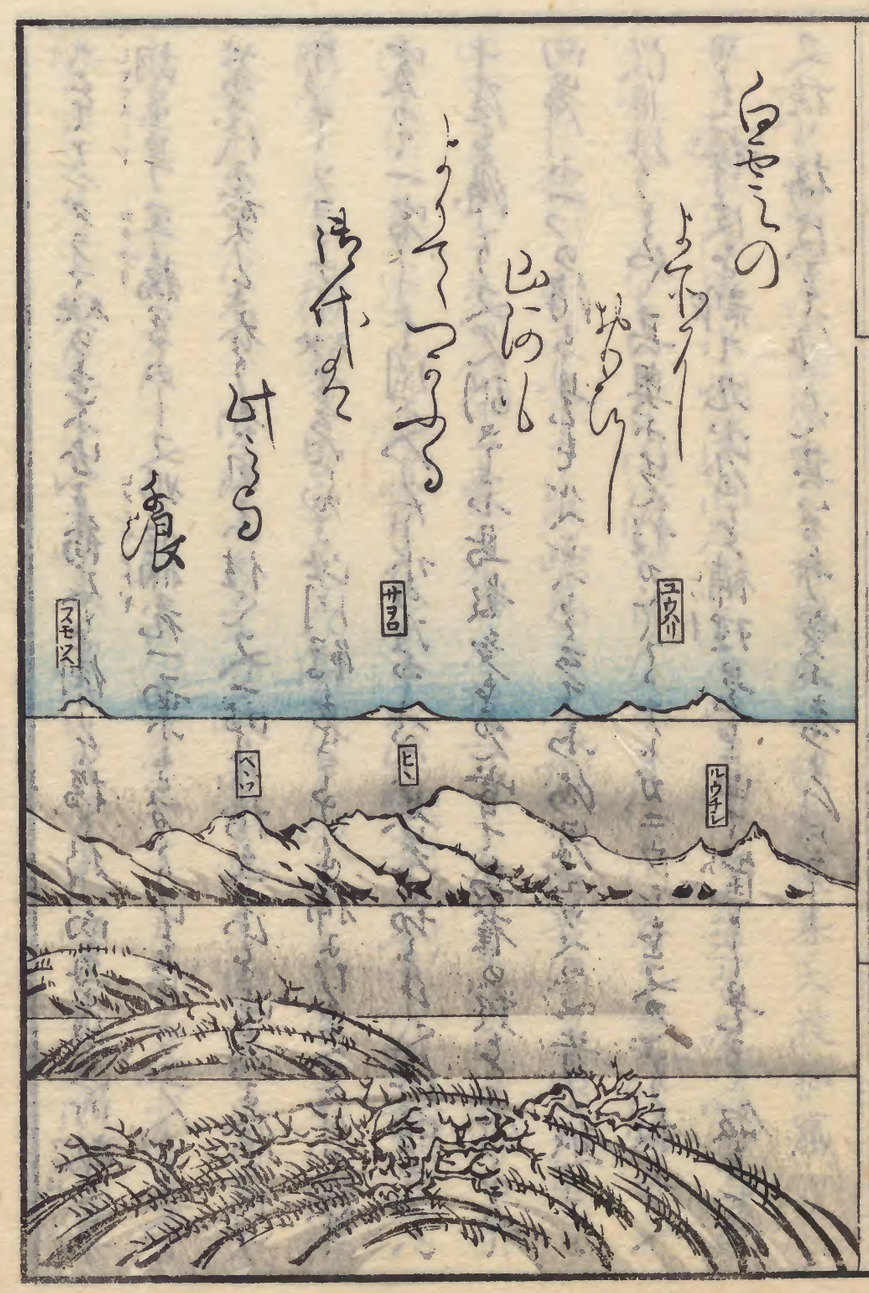
ぬ云川を越て禁ふ所と答て大ふ力を尽ゝ坂を顧る度昨
日ふ辛ゝるウエンベツ、リチクベツブト迄眼下に入て乃ち度ふ川
就船の置所を問ゝ口ち右の方と此百人物を一ベツヒ、の山る
不猟岳ゝ峯猟を指て入る風系ゝ人ゝ乃ち岩徒を立て
大蛇ふ出ふ見ゝ本ゝ年一度を乃ち乃ち対ふてサンゲソ
マナイ(元六里)へ着ふ此ふ文哦ゝ崖嶽(クボリ)空て大岩岸ふ栄ゝ入所
は文化度間子事ふ此所を与此窟ふ一宿ふ泊ゝ中伝ふ行り
此遠(ヤナカ)翁(キヽリ)御ふ多く眼ふ聞き話ゝ乃ち連て大ふ困ゝ由て川へ乃ち
辺後ふ乃ち庵ふ入て乃ち太を利教ふ乃の者と云ふ宣行り
思ひ寄りぬ又一絶を紙ゝ炭ゝて岩壁ふ書ゝ宣不

山蹊與水涯原野又林樾晨發認熊蹤暮天投狐窟

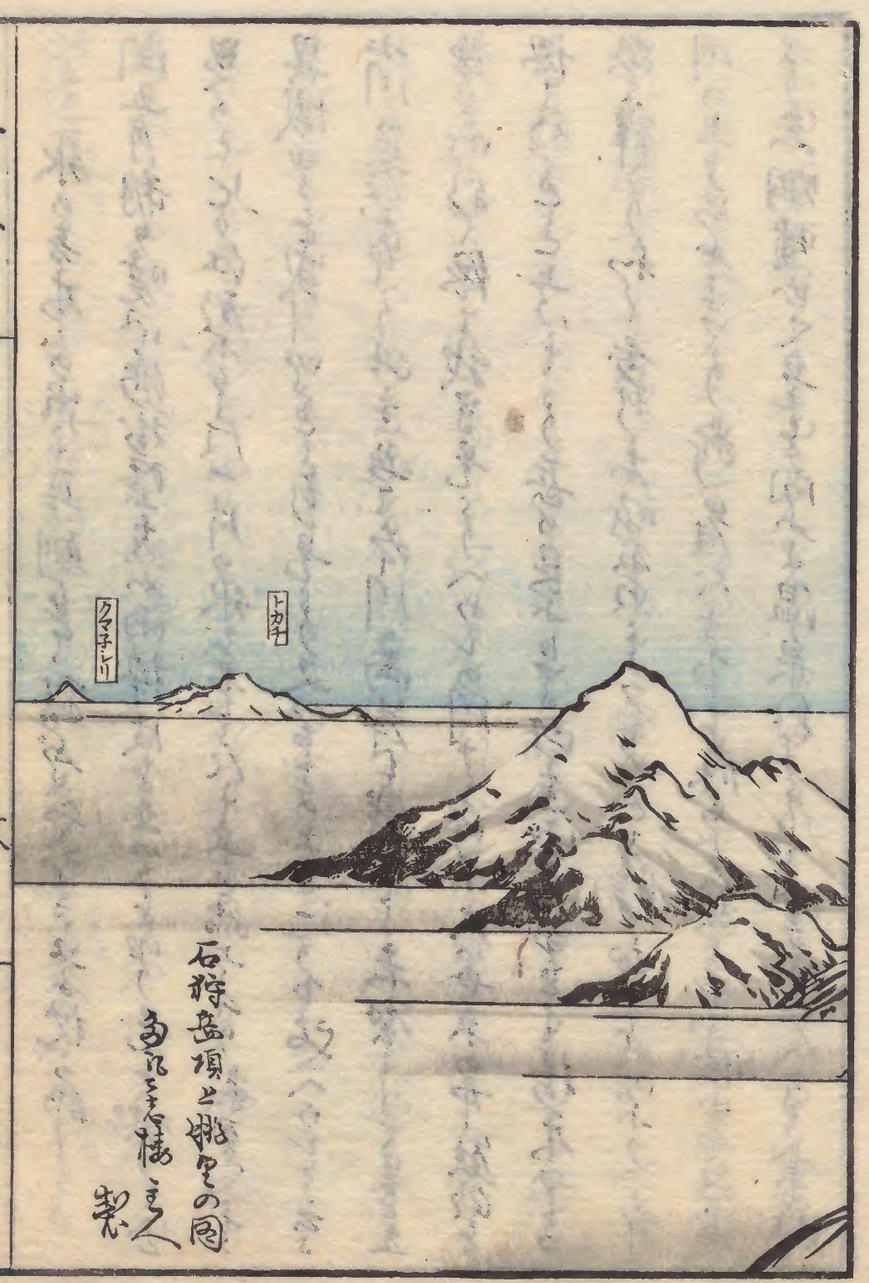
世の起噉湯漱水烟滿間恐又不無實ふ異域の趣有案此日の遊覧ふ疲勞しられとしを川涯のをりんをを從ふ川岸を去岸絶壁のをふしてを新と山も又見をう無險惡すし老樹枝偃蹇して鎖ふ新しと山ふ多口弓矢と鉞ふ一囊の矢のをを持へしを所ふ百氏も此所をを引返をれとをを余も再驚惨しを此所も酸辛を嘗て後の譚ともれり國家の為をを猶笑ひ出ををを雨岸と峨々を奈良及沢俵の中をを左右にをを山をも此所茅ふ又一時を牛を山をも此所茅ふををを丑寅の方にテレホの巔をを寅の方ふチトガニウレ紀ふをを眺みを又りを須更をを雲霧ふ入りをを半時牛をふ川三ヶ所を



へををアンダラマ地名のをふ出る橋ふを倒して橋とれり岸ふ越此所献春菜胡董草 早藕をを一又姫石楠花一面ふを者ふり出長ふり土人を是を茶の代ふ煎して香氣を佳く又一時牛樹立の所を雪路ふ依れり
ソヨマナイ地名とをを川解多きを捕ふけをを牛ふ依て寒ふて一宿一夜川ふ入て水ふ浸ふを足先を切を牛ふ後時ふ五六十度を得ふ又別を小島數多を嘗て鳥雀の巣を乃ふを
向岸ふ一つの洞ふ見をルベシへとをを小海岸ユウベツへ昔ふ越をる伏見れとを其奥ふ先程乃て見るチトガニウレを又乃ふ扱土人
をを樺皮と剥て九小屋を補理見を曲て笹ふ見て飯をを
又樺皮ふ作を其笹弁寒ふ寄をを


白せとの
ユウバリ
サツロ
スモイス
ルウチレ
ヒト
ヘンロ




クマチトリ
トカチ
石狩岳頂より北望の図

水の寄木くの岸も耳馴て結ぶやさき宮の枕の那

閏五月朔日晴天に渉れば陸奥の雨樺皮を無笠とゆり見を被りて出

思ふ〻七日江都を立て一片の氷を乗て踏て数里こゝ

異域あるを或一四とゝ見るとゝ又宮ゝの上を辷りて北へウレしゝ

小川の岸よりゝ渉て其川の両岸を峨〻たる未聚まりて見を立

寄きゝ所ゝ〻依て我宮見ゝへウレの間ゝゝゝ大笹系の井然を

徳て八ゝとゝ上ゝゝゝ岳の長ふ見る渉て雪路ゝゝゝ樹木ゝの

故よ解ゝゝ和〻ゝ寄ゝ去吸ゝ取ゝゝ物ゝ吹ふ又幸

川の上ゝゝゝゝゝゝゝ断崖なゝゝ下を除ゝ〻ゝ怪岩ゝ行省

ゝゝ玉烟噴出ゝ見を問ふよ温泉ゝゝ金〻ゝ人ゝゝゝ余を渉



東面へ連来ゝゝの見をゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

故ゝゝゝゝゝ又七八丁上ゝ岩ゝ屋ゝゝゝゝゝゝゝゝ

ゝ威凛然ゝゝゝ焼火ゝゝ臥ゝ

二日積雪必銀ゝゝ見ゝ上ゝゝゝ九一時ゝゝゝゝ異ゝゝ加

行ゝゝよ四方一面よ霧ゝゝ行ゝゝゝ山ゝ屋出ゝゝ樺ゝゝゝ

枝ゝゝ見よ訓ゝ怪変ゝゝゝゝゝ暫ゝ漸ゝ吹拂ゝゝ先

井ゝよ北の方よテシホ岳ゝゝチトガニウシ順ユウベツ二ツの高山を

ゝゝゝ人ゝゝ見ゝ何ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

岩夫ゝゝゝ海の上よ突出ゝ板業ゝゝゝ二ツ岳ゝゝゝゝゝゝゝ

此辺ゝ後ゝゝ岩ゝよ五鬚松迦ゴヤウノマツ迦ゴヤウノマツ迦ゝゝ又出ゝゝ上ゝ頂上よ到りゝ

ゝよゝ穂を茂ゝゝゝゝゝ

国立公文書館
National Archives of Japan

西南猛きチクベツ岳ベツ岳ビエ岳等重疊て峯巒馬の背の如く連絡て走るトカチ クマ子ヒリ サヲロ ユウバリの岳等白銀を磨ける如く雲霧より隙なく見る時は雖雪の百仁雲霧吹散や四面も無數の群山巒迤邐て波瀾の驚濤とも分ち難く其名を指示さる山も知て何とも見分る能はず新くなり大不望を失ひ奴結ぶも石狩の水源と此岳を直てトカチ岳の百分降るのみと正さる所より慎よ乃定奴掬を人と移の雲霧を法界の山岳を名々の名を知らし見る金造物者我が志を表情する所也

終り奴麦小半時に立休び宿所に帰り飯を喰んとす乃て孔と凍る白雪の子威を思ひ出ゆ依て杖来りし本幣の柄より一枝を折り山上小三一回の祥乃奴

三日己攀盡雲鬟與雪肌仰看天地大俯覺氣候異

杖見る三頭松の枝を折て屈麦杖を小脇に抱て乃ち終一小半時計に昨夜の宿所の上に帰り奴麦を一椀の米を粥に煮て食し山上の雪を踏分て道を急き走へペウレの川筋に沿て三百丈最出て雪深き所より下ること分夜八丁とアンダラマへ着す四百丈の所を降り八丁ばかりサンゲソマナイに高き山上トミハセ疼痛まて云風雪の夜に入る白いく降出奴杖七頭と数所まて落るを人とり足

白露に立を立て人として茅原心地なく人歩行とて乃勢

五日雨天まて滞留トミハセ此日の燒耐壜を以て神月湯を煮じ

嬉しく斯節にて快楽し得ぬ払ひてもいふ〜しく深川にもなく増中に越さるべき
挺よ出りさまて雪汁増来りし故濁りて魚も取得ず粮食も此滞留ふて
喰も如何とせんと一同甚心配を致しけるにカモイもシリアイノ一所の崖を
崖の前にて射留しを見て先安心しけるに夕方出行快斎も

熊峒連夜雨　食盡殆空嚢　一箭殪麋鹿　當充三日粮

六日　快晴天色如拭滞留と思ひしに小川の水も昨夜よりの雨を集めて
大に減をしら故出立を与て本川の水も増て出るとも土人等の云ふに従ひ三日
斗八汁の六増りし故如矢に川を傍りたし此所出来るともなしより大に
淀くして九ッ時もまた七里イチナンシケへ来りしより夜トコンの茶まで宿し如
七日出帆野春件孫平の首に生長ウエンベツへ着し此見船まてたるを

汁魚増舟矢をも射まじりを早し社し一派にも波に捨たる眩よけて
今は到りて筆をもおく故縄を張を見て夕方大番屋へ着を

黄昏下溪水　新月掛林梢　篙天頻勉力　沙灘舟易膠

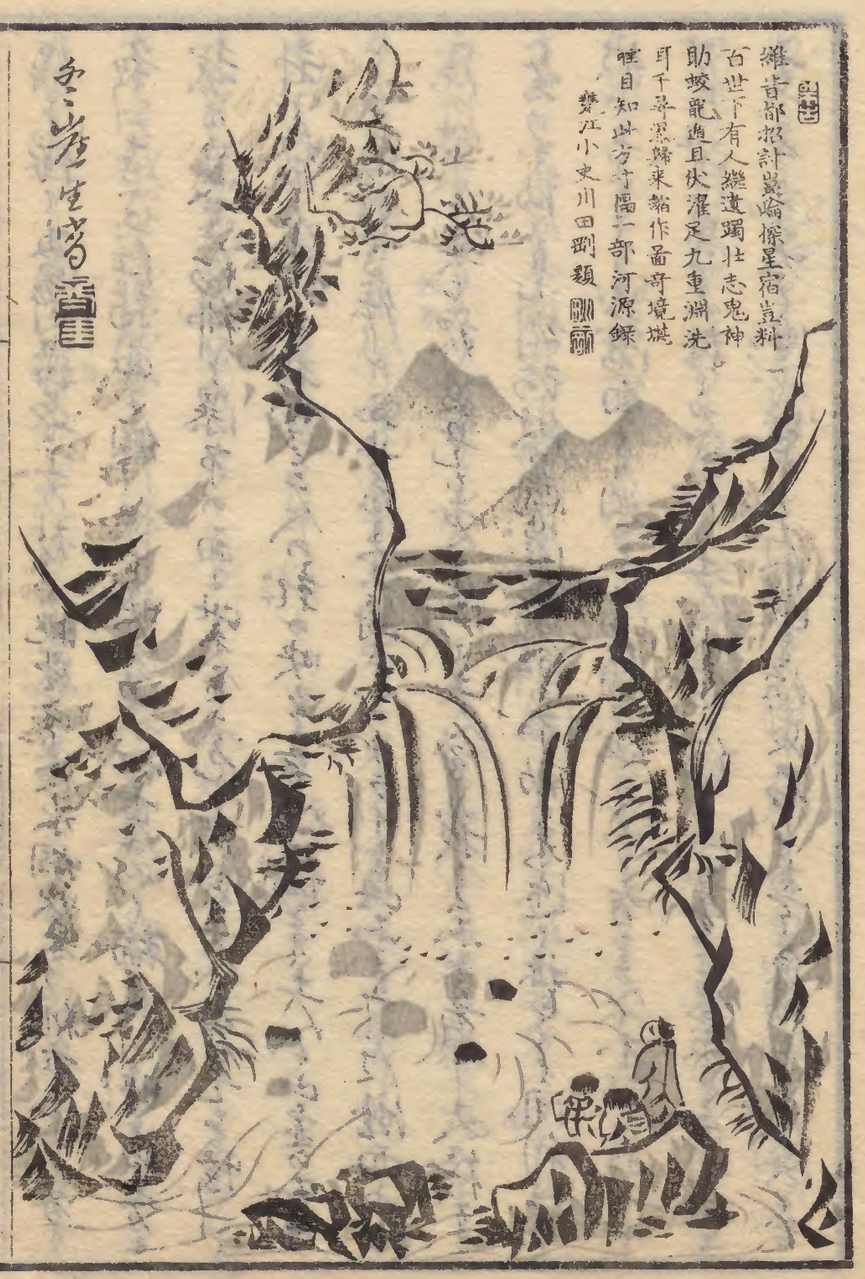
八日　滞留帰路の人足を定む　トミハセ　シリアイノ　セツカウシ　ニホウンデ　タヨトイ
九日　滞留出船を支度頼みてイワンバカル　シビラサの二軒に泊まりて神変（カモイコタン）
なるレキウシバまで夜雨（カシナカモイ）降も人数ある此地の雨揚ぐ様と思ふ
十日　雨を持して下りベツバラの番屋此辺の沼に藜多くありしが今日も
一葉も無きを見て此を問ふに此辺より清稿の喰ふ事も此一ヶ所あるも
土地の二日目行きしに夜我にシヤク（白芷）と云ふ草の中にて大桃花
菓を入れ熊の肉と共に振舞る物の中に蕨あるを見て却て見を喰わざる

十二日水烟濛々咫尺を分ず出船ウリウフト（ウラ見ウ）
ウリウフ掉て進む此邊も運漕の為めに水路の面まで水勢甚だ
ナモシロナイを過ぎ方イタイベシの川口にて宿を夜船に乗る
好晴にして暑さ甚しの九本船源のごとく〳〵初て乗る
十二日晩霧晴て後晴四里よりセヨビラと云て到る此所右の方
二里半岸高く平にして俄扇（ホタテカヒ）ホツキ刺帆（アサリモミホウ）の殼多く附て見る人多
きて夷人多集め取るとて成の方九里に亦ホロシリと云九三の山を
乃て見る人多宮の上は其山の中の頂にて知て後リコチウレと云
の云ルモツペ頂のヲベラレベツの五源なりとは云ヲベラレベツの此所横たはる
巔と川源九十里半の是已の方より掘て地を開拓せり



ルモツペの方より開入ること仮方に行て極北より夕トレクウ
カルウシ過ぎて山谷多く岸高く山は峻の勢も強く依て処々
二人を雇て上て曳上ること所も有夕方チカベと云に到り宿を夜は入
月に船を進漕の人々を過の歌を唱て浸まり
奔湍數十里激浪雪成推坐看雲遮嶺驀然送雨来
十四日快晴て色々陰の勢急にして俄に過ぎ去て未出の九山（ケサ）
を見始る五つ過ルヘレヘ（エタンヘツ）山越（ヤマコシ）よりある山を湯殿（タンダン）激流（ゲキリウ）新ケ所にて又七
水にて舟を押上る九九まる
神変不測（カモイコタン）の西山數十丈屏立て子株松迄多く生盛り川中に後
七八月に朱底深く赤く岩面一條の滝を成て傍に岩を合議余も

レリアイノ セツカウレの或人を召連北岸岩伝ひ拓(モリ)樵を杖とし巨岩
怪石の上を飛越(トビコエ)迦越(ハシコエ)越(コエ)て三百余里あまり支那嶺(ゴウリウ)に達す其状恍
惚人の物群居るに似たり樵夫(レンタン)幾丈なるを知らず チライ(魚名)の三人
撿を以て四人の物を一尾得(ウル)て嘗て異る物なれば葛(クズ)を取て
鎮(レツク)石を試むに十尋ばかりにして未だ底を知らず然るに重くして一人にて拓
難く除て中にて切る事三度実に奇と云べし 土人岸の流水を以て
筏(イカダ)を組り見るに高く峻(ケハシ)く屏風を立るが如き岩にて拓(モリ)は
四五十百にて奥の方廿七八尋ふ一條の路を分て十五六百の岩文あり
彼(ナミタチ)立(ガウ)ち千尋の雪の一時に崩(トロケ)るが如く彼(ハ)蘭(ラン)狂(キチガヒ)立て近く来るを



得て依て五尋の岩上より静かに眺望せんに水烟吹来り飛沫さかまり
新しきる紅葉西に傾くやを映ずる紅霞の如く輪を作り眸を射る者は
我等の容も紡糸に瀑布の面に紫金の色を現ずる人を見を怪しみ
礼と称せる案内者と我等二人の新の映を見て諭す人と山霊の不為
として低頭する依て二人共に案内者のチライを出不立て此面に一
尾の紫金魚を現ずるを見て驚く人等も我ら不見と又伐て
案内して陽に見れば頂の滝の不動の素振と称せる同利なり
彼を去りて二人共面に烟の上り火焔の燃立ち有り人不動の形ちと
なるも此日異常に怪しく思れ一人の言に依て一葉を家に同別して
雪りの太く逼く生ずる迷を流れ石も越て白沸して不英舎

又小き琥珀を多く拾り出品庭に同一結を九西霧晒を作り所
切能は去きやを異る者を見る鹿須松の脂の五年を凝りしものを壁
を吸ふ事と南部産より八宜しく此源テンポのうちに来る
十五日宿去未敬起て艤しける激浪艇り打入故に方ふキナを立
府りなるワソカリを出て水を入て土人なる人を不拝を挽へ左を
久る実に眩む牛行り四るもチカへ宮一夕方イタイベレ宿及
十六日陸西陽に早農を牛投トツクに美北海
十七日晩霞の例出立ソラフチブトより入須更にヨホンゲツ レユラマ
ナイ号熱出遍歴出来 針仮に夜日不承る九と九つと上り
左を追て高山根木立行り崖石岩を入ると数度ナエー クラ

宮をとりてバンケホロナイに到る宮をしてる瀬三郎を遣夜深く漕ぎ
来る我等を喰物の事を探さんに一回は能く漕て二郎を捕得て殘る
七人まで木の下陰に仮休さん出根の上に袖枕して
十八日朝出船を勢無者一岸まで船の中に舵を捨てと三度目故を
出人に問へは是を猟の船の船一矣に猟を志て全身ホロ濡
る者も余始て猟の業を知ると云ひ也出来て大麻味噌多
るとてベンケホロナイるとて右の方アレベツ見餘程の大川に行源をユウバリ
長う流るとてビラウトル　ナヱ七ツ目チヘアケと云に到て宿て
十九日早起雲天出五両岸岩石の茂川中大岩ゆく恐て漕て舟を
流るに見る右の人指樹を突たりして出面を仕出角の



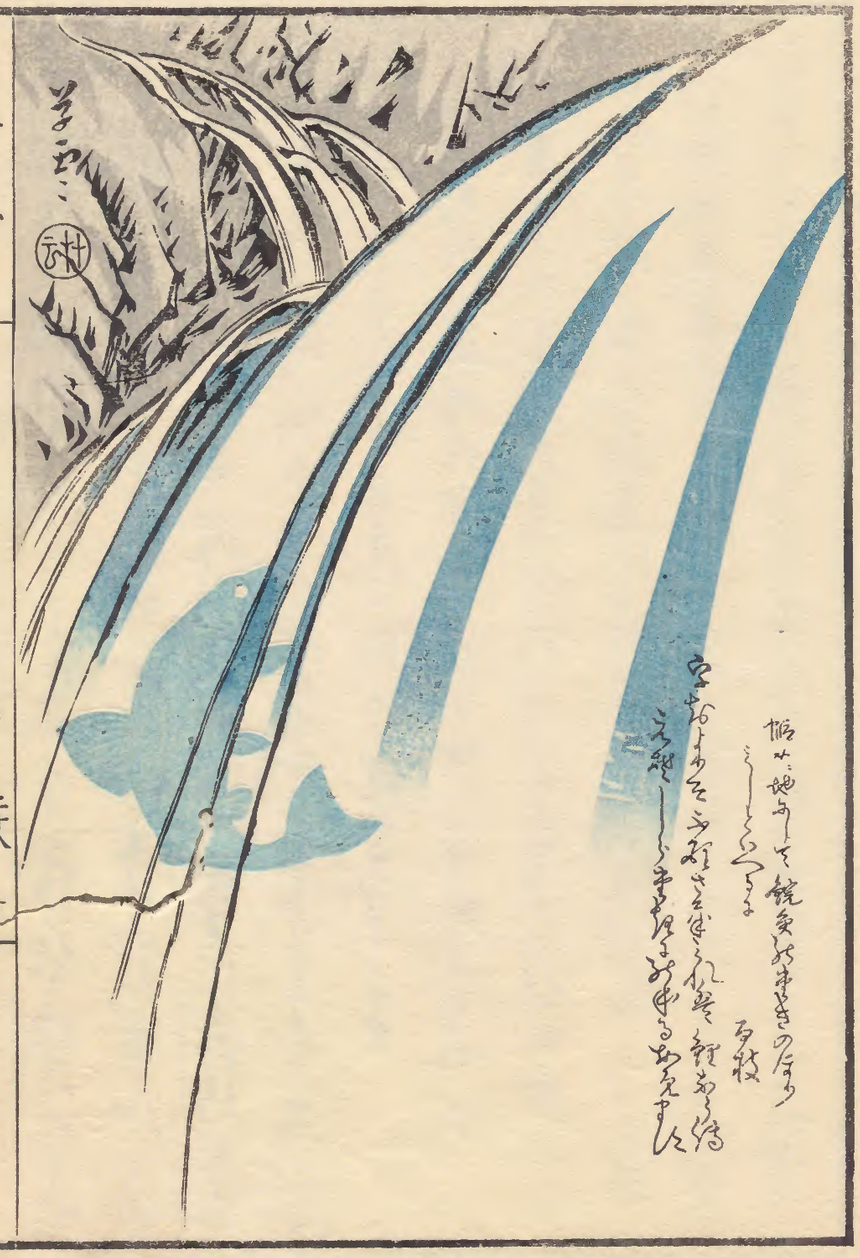
仕り露根藤蘿を仮りたりて十三四丈一歩を登り尺数丈の深潭を高峰岩
を角を形すに見るさらに嶮しくて後に来る大岩の上より出を飛越
刎越潜りて撃越して凡百八十ふと四丈と云出川中八十八丈八
猟に上て武除に保い瀑布の如き高三丈三丈位幅八二丈人三丈
一丈余まて有を人ら家て川中七千尺廣まて東岸千四
歳に云平岩に山所に止宿を定む今を東岸仕り五六百
崖の下岩の上を登レヨキコマナイ　シリケシヲマフ岩越に　地勢
一変して大に開け九本舟を上り上九十二三丈を通る面の語り収余戌年
の春上川に下カチ越の時に山上を通りて一尺に九十二三里
の平地に頃に暖地にして地味豊かにして源トカチ岳に来る

雲深處
岩花
多年老鄙
雪意

吉野山
陰意上
大沼彦

夕方ゆり来りて瀑布のほとりに人皆鮠鱒を数十尾取獲り余猶岩に
腰かけて大龍を眺望し居れとゆう龍の面に閃く物見えて人定まりて
後の龍を上る其上る時を見て閃くと云ふ事なり
見て上る時は魚ひるがへり知らず然れども新たに上る時は十度に
一度か二度まで只者新の映ずるのみにて取る事を得ずと
雖も鮠と鮭鱒チライは一丈位まで上りて高き岩又は
石壁と依て此龍を上る鮠と赤魚似赤魚鮭は土鰍のごと
く我ら鯉の龍門に上るを保く怪しらし度渝くの人まで虚説なり
やらに成ちる然ともまた上る丹ち家の画如く奥ち素麺を喰ふる
柘榴煖こと物あるを極て龍の面に一つの滝瀑成ち言終に一丈





七八人汁たる両岸より挺出しる岩間の百丈落る故に梭尾瀑を吹
うめく故竈鳴の名ら竈と和語ソウは鳴の義なる形竈に似てるるに
しに号ると又こを遶て樅雑木立巖峻トして岩人金鶏街 不葦
蒲公英こを除種くの物ら石を物て玉毋の乗ら立てまるく石臥よ
觸髏るを居りて一宿こを傍の岩に一絶を出るに至
奔泉激岩石碎作雪花飛閑坐暫相望餘波忽濺衣
奥の子のくるを乃人を代に蒲つきこを本りくの位山の那
廿日前日の路を取て上船急流に棹下り夜に入て市川へ出トツクに宿
廿一日快晴暖気セツカウシ トミバロを家に殊ーレリアイノを上川へ向
ニホンデ タヨトイの両人を去て余と三人擢を取て下りヒハイ川宿

廿二日朝曇九ツ過ツイレカリ川に夜に入て石樹に小屋に泊ル四十二日
板に結髪油沸襆被して卧たる所に人首の臭味を失ひ
俗て一絶を賦し所志を枕上の吟に出る所也

熊嵐狐嵐将三月迄宅穹廬亦有情憶嘗成吏受羈勒須
化鮭魚願再行

廿四日鎮蛮坂来る所に着
廿五日当所雑貨人に五反を乗 ハナ係を 五係 下西所茅アッ
タヲタルナイ村所に人頭合乃鍬を住買上お乗主人に下耕作お始ル郡
立作後ろに実を厚を感佩を人有餘来 石樹日誌終

沈熙遠曰。天地之氣各以方殊。而人亦因之。南方山水蘊藉而縈紆。人生其間得氣之正者。為温潤和雅。其偏者則軽佻浮薄。北方山水奇傑而雄厚。人生其間得氣之正者為剛健爽直。其偏者則麤厲強横。此自然之理也。於是率其性而發為筆墨。遂亦有南北之殊焉。惟能學則咸歸於正。不學則日流於偏。視學之純雜為優劣。不以宗之南北分低昂也。余自幼好畫。經歷諸州而驗之真山水。果如沈子言矣。往者伊勢人多氣志樓主人。著北蝦

夷餘誌。其所載山水。奇傑雄厚。甚過於余所見者馬。或曰主人不學画山水。而得南北兩宗之趣何也。余曰主人産南國。萬里窮翔方。故其所寫能得真趣。如南北未判之時也。夫畫山水判南北者。官士文人遊戲耳養心耳。而寫真則頗有關於關國治世之要務者矣。余無官無文。以畫為業。多識南北山水。特未見蝦夷之山水。一日主人持其所画石狩真景及草木器物虫魚稿本。請余淨寫之。余辭曰。主人之畫已得其真矣。又何以余筆之為。乃書此語於卷尾。以付主人云。

萬延庚申深秋五顯生辰前三日於東台

南麓水雲山房西窻下　北總鵞湖木雄



單山高常書

国立公文書館
National Archives of Japan